

比較研究の方法～教育と研究の実践から考える

中井 章子

〈要旨〉

現代の大学教育において、専門教育が重要であることはいうまでもないが、教養教育、すなわちリベラルアーツ教育も、不可欠である。現代の大学における教養教育では、一人ひとりの個人が、人間として良く生きるため、社会や世界の一員として責任を果たすため、「自分で考える」姿勢を身につける機会と場を与えることが大切である。「比べること」が「考える」ことに寄与するゆえに、「比較文化」という科目は、現代の教養教育にふさわしい科目である。

18世紀ドイツの哲学者カントは、哲学の「学校概念」と「世界概念」を区別し、「世界概念」の哲学における「世界知」を担当する講義として、「自然地理学」や「人間学」の講義を繰り返していた。カントによれば、「考える」プロセスにおいて、第一歩は、「自分」を自覚することであるが、第二に、「他者」の「視点」や「立場」から考えるという「pluralism」が必要である。「比較文化」は、「pluralism」により、将来「世間／世界」で生きる学生に、卒業後の「経験」の予習をし、経験を秩序立てて理解する助けとなる。考えることの第三段階は、自己の視点と他者の視点を総合して、自分の考えを持つことである。考えるプロセスは、「知恵」を目指す終わりなきプロセスである。「知恵」や「永遠平和」や「世界市民」は「理念」であって、歴史の中で実現するわけではないが、そのような「理念」や「人類」を視野に入れることが、現在を生きる希望となる。カントにとっての「比較文化」はそのような「理念」を掲げた営みなのである。

キーワード：比較文化、リベラルアーツ、教養、イマヌエル・カント

1. 21世紀大学教育における比較文化——リベラルアーツと比較文化

21世紀の現代、人びとの営みや職業において、専門は細分化し高度化している。現代の大学教育のなかで、専門教育が重要であるのはいうまでもない。しかし、教養教育、すなわちリベラルアーツ教育も、現代社会に生きる市民の教育として大切である¹⁾。そこでは、ひとりの人間が個人として、いかに良く生きるかがテーマとなると同時に、社会に生き政治に参加すべき市民として、政治的判断を行う上での考え方や行動の仕方について、知識

と反省が欠かせない。現代は民主主義社会で、人びとは平等に政治に参加するものと想定されている。かつてのように政治に関わるのが一部の人であるという状況にはない。代議制では選挙によって代表を選ぶ。

ほんらい、一人ひとりが自分で考え、行動し、政治に参加することを前提に、選挙による代議制の政治は成り立っている。「憲法」や「国民投票」や「社会のありかた」や「国際世界のめざすところ」が問題になるとき、雰囲気や感情で選択したり、他者やメディアに動かされたり、狭い視野で考えたり、利害や党派性だけで行動したりするのは困る。国境が閉じたものでなく、多くの人びとが移動し交流する世界で、ある国の政治は隣国や世界全体に影響する。

現代のいわゆる「大衆社会」、マス社会において、ふつうの個人の力はとても弱く思える。20世紀の世界は「全体主義」を経験し、民主主義の社会においてなぜそういうことになったのか、同じことを繰り返さないために、さまざまな反省的思索があったし、今なおその思索は続いている。まったく同じ繰り返しはないが、過去が姿を変えてふたたび表面に出てくることはある。時代が変わり、世の中の表面的なことどもは大きく変化しても、似た事柄が甦ってくることがある。それは、問題を十分に深くとらえていなかったからなのではないか。振り子のように右に左に揺れるのは、振り子の下がっている元の支点そのものを問うていないから、また、追い出したと思った「悪霊」がまた顔を出す（ルカによる福音書11章24-26節）のは、追い出しきれいに掃除したあとの家を空虚に放っておいたからなのではないだろうか。

個人が無力であることは事実であるが、いっぽう、「みずから考える」個人の实力を高め、そのような個人をつくり、そのような個人であろうとしなければ、社会は平和にならないし、存続があやうくなるというのも事実であると思う。「啓蒙」の課題が、「自分の理性 *eigener Verstand* を使う勇気」をもつこと、「自分で考える勇気をもつ」ことであるとすれば（カント『啓蒙とは何か』²⁾）、現代も「啓蒙が完了した」時代ではなく、「啓蒙」がまだ課題である時代なのだ。各種メディアが発達し、「学校教育水準」の高まった現代には、カントの生きた18世紀とは異なる困難がある。「啓蒙」は必ずしもどんどん進むのではなく、後退することもあり、ジグザグ、グルグル、さまざまな軌跡を描く。「自分で考えること」は、一人ひとりが一から取り組むべき、永遠の課題なのである。

専門だけでなく、「リベラルアーツ」ないし「教養」の教育はなぜ必要か。

第一に、専門に創造的にかかわっていくには、専門の基礎となり、専門を越える、広い視野が必要であるからだ。サッカーやバスケットボールのようなスポーツでも、全体や先が見えていて初めて、個々のプレーが生きてくるし、良い動きができる。

また、専門とは、ひとつの仮の枠組みである。その枠組みは時とともに変化していく。旧来の枠組みを壊し、あらたに組み替えたところに、新たな枠組みが創造される。知の枠組み、すなわち「パラダイム」は、専門分野のなかでも、知の全体においても、さまざまな次元で変化する。

第二に、それぞれの専門は、専門の中で完結せず、広く社会に影響するからである。たとえば自然科学の研究。先端的な研究は、非専門家にとって理解が難しいが、研究成果は、科学技術として、社会に生きる人びとに関わってくる。科学技術の専門家は、みずからの携わっていることの結果について考えるには、人間や社会について深い理解をもっている必要がある。いっぽう市民は専門家として研究に携わっているのではなくても、科学技術の位置づけを理解していなくてはならない。

第三に現代人は、個人として、さまざまな場面でみずから判断して生活し、生きていかなければならないからである。自分のことに関しては、専門家の意見や知見を踏まえつつも、決めるのは自分である。医療にかんしては医者にかかせ、政治についてはお上に頼り、というわけにはいかない。カントは『啓蒙とは何か』において、身体や魂や社会について、医療や宗教や法律の専門家に任せてしまうことを批判している。「自分の理性を働かせる代わりに書物に頼り、良心 Gewissen を働かせる代わりに牧師 Seelsorger に頼り、自分で食事を節制するかわりに医者に食餌療法を処方してもらおう。そうすれば自分であれこれ考える必要はなくなるというものだ」という姿勢を問題にしているのである³⁾。みずから考える人間であることは、本人にとってだけでなく、「グローバル」に「相互依存」するようになった世界にとっても重要である。現代、社会や政治についての個人の判断の力は、上に述べたように、微々たるものに感じられるかもしれないが、積もり積もって、世界や歴史に影響する。

第四に「リベラルアーツ」に関して注目したいことは、さまざまな議論をはらみつつも、「平等」と「民主主義」を政治的共通認識とする21世紀の現代において、「教養」や「リベラルアーツ」は「エリート」に限られるものでなく、すべての「普通人」に関わるものだということである。そもそも誰がほんとうの「エリート」かは、古今東西、つねに問題であった。「社会の指導層」「支配層」という言葉を現代でも聞き、みずからそのように自覚し、自認している人びと、反対にこの人びとに批判的な反体制派がいるように見受けられるが、この構造は21世紀にはとくに不安定な基盤の上に成り立っている。社会での地震や豪雨のような変動の中で、簡単にひっくり返ってしまう。「エリート」には幅広い教養が必要で、「普通人」は狭い専門技能に専念するという、20世紀前半にあった仕組み、現代でも大学制度設計の背後に垣間見られる考えは、問題である。現代でも人間は人間で、たんなる「人材」ではない。人間ひとりひとは、社会学的・統計的にとらえられる以上の存在である。

青山学院女子短期大学では、1969年に「教養学科」を設置し、2012年にそれまでの5学科を改組して「現代教養学科」を創設した。これらの「教養」を掲げた学科の創設に当たっては、戦前の旧制高校の「教養主義」を背景にもっていた人びとや、戦後の大学で「教養教育」が形骸化していくことに危機感をもち、女子短期大学でこそ「教養教育」を充実させたいと考えていた人びとが関わっていた。大学史において、18世紀後半のカントの時代には、20世紀後半の日本における「教養部」「教養学部」に該当する、「哲学部」が「下級

学部」とされ、神学部・法学部・医学部という専門学部が「上級学部」とされた。その状況においてカントの『学部の争い』は、「理性」に依拠して、「自由」に「批判」する「哲学部」の重要性を論じている⁴⁾。現代、大学政策が問題となり、世界中で連動しているが、そこでは経済的観点、経営学的手法が目立ち、学問（科学）論や学問（科学）の歴史や哲学はあまり問題になっていないように見受けられる⁵⁾。現代の「大学改革」の流れからははずれているが、カントの「哲学部」、第二次大戦後の日本の大学における「教養教育」の「精神」は、こんにちなお大切なものと考ええる。ただしそれは、必ずしも、学部構成やカリキュラムなどの制度に関わるものではない。「制度」は、「精神」を保証するものではない。「理念」や「原理」や「精神」の熟考の上に、「制度」の具体的な姿については、時と場所に依拠して、柔軟に創意工夫するのが良いのではないか。

21世紀のリベラルアーツにおいて必要な視点、分野は多様である。そのなかで「比較文化」は現代のリベラルアーツに不可欠な観点を提供する分野になり得る。「文化」は幅広い概念であるので、「比較文明」「比較宗教」「比較思想」「比較芸術」などの学問分野を耳にするし、「比較教育学」「比較音楽学」「比較言語学」「比較政治学」等々、「比較」と学問分野の組み合わせはさまざまに成り立つ。研究方法も歴史学、解釈学、実証主義、社会学的アプローチ、文化人類学、カルチュラルスタディーズなど、多様である。学際性、領域の越境・横断、諸方法論の組み合わせ、多様性の尊重が、「比較文化」の本領であり、その起源、存在理由であろう。

「比較文化」が現代のリベラルアーツ教育、教養教育に寄与しうるのは、どのような面からなのだろうか。

1. 「比べる」、「比較する」ということは、「考える」ための一つの方法である⁶⁾。あることが何であるかは、別なことを並べ、相違や共通性を考量して、語ることができる。何かを考えると、それを一つの視点からだけでなく、パースペクティブを変え、他の視点からも眺めて、比べるということが助けになる。「比べること」によって、考えざるを得なくなり、考えることが始まる。カントも言うように「みずから考えること Selbstdenken」が、人間にとって大事だが、「哲学者」「知識人」と自認するからといって、かならずしもみずから考えているとは限らず、「本で読んだこと」や「勉強したこと」を自分の考えとしている場合も多々ある⁷⁾。

2. 「考える」ということには、「反省すること」、すなわち、自分の第一次的な思いつき、感情、想いなどを省みて、自分の中で自分と対話するという自己内対話が含まれている。「考える」ということには、「反省 Reflexion」、自分が複数化するということが必要であるが、そのとき「他者」は自己の複数化のきっかけになる。「比べる」ということは、ただ並べて、それと無関係な第三者としてあれこれ言うだけでなく、自己に還ってくるところがある。

3. ひとは個人として独立した存在であるが、ある特定の時と場所に生まれ、育つ。ひとはある自然環境と文化的環境（家族、社会）のなかにある。その「環境 Umwelt（自

分を取り巻く (Um) 世界 (Welt))」のなかで、幼いころは環境を意識していなくても、ものごころつくにつれて、環境の影響を自覚したり、環境に反発していったりする。自分の自覚、みずからの文化の自覚は、他者との出会いによって芽生える。自己の文化的環境は、以前には「自然」なものと感じられていても、他者との出会いののちには、当たり前なものではないものとして意識されてくる。異国に旅してはじめて、人間の異なる生活の仕方に気づき、自国が新たに見えてくるということがある。自文化の認識と異文化の認識は関連している。地元の高校に通った学生は、別の地方の大学に学び、独り暮らしをし始めると、家族や地元の友だち関係において育まれた生活や考え方が、当たり前ではないものとして見え始めるのではないか。

4. 21世紀の現代において、「わたし」の「アイデンティティー」は、「自然に」「おのずと」成り立っているのではない。

地球規模で人びとが移動し、交流するようになった「グローバル」な21世紀において、19世紀以来の「国民国家」という枠組みは、揺らぎつつも、消えはせずに、存在している。しかし、「世界」のなかの「個人」が、「家族 (イエ)」や「国」や「地域」や「民族」の枠組み、「共同体」とどのような関係をもつのか、自明ではない。「個人」という近代欧米社会の基本となる単位が、「マス社会」としての現代には自明でなくなり、「個」は「塊」ないし「諸集団」に埋没させられがちである。また、孤立した自分個人を、集団との違和感として意識したとしても、自分が何者なのか、はっきりせず、不安になるだけだったりする。

ひとりの人は複数のアイデンティティーをもつ。そもそも人間は生物として見ても、みなハイブリッド (雑種) であって、父と母の両方につながる。「文化的伝統」とのつながりは、意識しないと希薄になるし、実状として希薄になると、無理やり伝統意識を強化しようとする運動も現れる。イエや、「万世一系」は、自分につながる一本の「系」だけを浮き立たせようとする、人為的構成なのである。

西洋と東洋、ある国に対する「外国」の文化的影響などを、前提となる枠組みを問題にせずに問うことは、論理的には難しい。「西洋」とは何かをつきつめると、曖昧になり、問題が頻出してくる。だからといって、勇気をふるって大きく問題を捉える姿勢も、「文化」の理解には必要である。

このように考えると、「比較文化」は、「比べる」こと、すなわち「比較」という方法をとおして、自己理解を深め、他者を理解しようとする事柄なのではないかと思える。そのとき対象に即して「理解」しようとする姿勢と、自他いずれにも距離を置き批判する姿勢と、両方が必要であると思われる。

5. そこで「対話」という、ソクラテス以来の方法が効果的なのではないかと思う。ある現代や歴史上の事象に対し、テキストに対し、他者に向かい合っただけの対話である。その対話は、そのような対話をする人どうしの対話につながる。大学では、ゼミナールや講義における、学生同士、学生と担当教員の対話が、「比較」という営みそのものに寄与する。

文化について「解説」し、「比較文化」の紋切型知識を教えたり、覚えたりすることは、創造的なことではない。

以上、思索の断片を並べてみた。わたくし自身は、1984年から33年間、青山学院女子短期大学の「教養学科」や「現代教養学科」において、また他大学において、「比較文化論」やそれに関連した題目の科目を担当してきた。近年の比較文化論の講義では、

1. 比較思想として、「自然と芸術」というテーマのもとに、プラトン、プロティノスなどの古代西洋思想、中国の自然哲学と芸術論、レオナルド・ダ・ヴィンチなどのルネサンス思想、ゲーテ、ノヴァーリス、カスパール・ダーヴィット・フリードリヒ、ゴッホ、パウル・クレーなどの文章を読みつつ、美術作品を鑑賞し、自然哲学と芸術思想を考えた。

2. 比較宗教と比較生活文化に関連しては、「食文化」に焦点を当て、食を通してユダヤ教・キリスト教・仏教・イスラム教・神道などの宗教思想や哲学思想を比較し、共通性と相違を考えた。食をめぐるのは、現代食文化と伝統的食文化の関連と相違、風土と食文化の関係、食文化の移動・影響、人間関係と食文化など、食という身近なテーマから、文化論を多様に展開できる。

3. 異文化間のコミュニケーションという観点からは、16世紀半ばから19世紀にかけて来日したヨーロッパ人の日本滞在記や日本文化論を題材として、欧米人と日本の出会いの歴史的脈絡、異文化の交流の実状、理解と誤解から見えてくるものを考えた。

これらの講義においては、原典のテキスト（文章）を学生自身が読んで考えるようにした。「古典」のすぐれた文章は、現代の若い人にも訴える、生き活きた力があるし、先入見、知識がない学生ほど、「古典」の重さに対する偏見もなく、「古典」に同じ人類の仲間の書いたものとして接することができる。読んだことについては、学生自身が考え、コメントを書いて提出することにし、それへの応答を返すように努力した。同じクラスに座る他の学生のコメントや担当教員のコメントを通して、学生相互や担当者自身も学ぶことができる。

いまの学生と、四、五十年まえに学生だった教員では、世代が異なり、経験も違う。演習や卒業論文指導は、そのこと自体、「異文化間コミュニケーション」の現場ともなる。人文学の学問のルールは守りつつ、文章力をつけるよう努力する。中身はともあれ、やり方という面では、ケンブリッジ大学などの指導教員による指導システムに似ている。「論文」のテーマは、「比較文化論」においては、基本的に、執筆者自身が選ぶべきである。将来研究者になる学生は、短期大学にはほとんどいない。それだからこそ、自分でテーマを決め、研究し、熟考し、論文を構成し、文章で表現する一連のプロセスが貴重なのだ。「比較文化」という茫漠とした分野は、学生の試行錯誤に適した分野と言えると思う。

かつて学生時代に、古いノートを読む老教授を揶揄した発言を聞いたことがある。ご本人が退屈していると、若い聴講者にも退屈になるのは道理である。しかし、学びの蓄積の

上にしか、広い視野の講義はできない。大学で教養教育にたずさわる幸福は、古今東西の「古典」をじっくり読み返す機会をゆたかに与えられるということだ。時間を使い、苦勞して諸外国語を学んだことも、生きてくる。知り、好きになり、楽しむというサイクルが動いてきて、『論語』が語るような「学ぶ」楽しさを共にできるならば、幸いであろう。

2. 1800年前後のドイツ語圏における異文化研究、異文化との対話の意味——カントの場合

ここでは、18世紀後半から19世紀初めのドイツ語圏において、異文化へのまなざしがいかなるものであったのか、異文化の認識と対話の意味がどのようなものであったのかを、カントの場合を中心として考えたい。

異文化へのまなざしは、すでに述べたように自文化認識と異文化認識が相関するので、自文化をいかに捉えているかということに関わる。18世紀後半には、「ドイツ」は「国民国家」としては、未だまとまって存在してはいない。「ドイツ国民の神聖ローマ帝国 Heiliges Römisches Reich Deutscher Nation」(962年、オットー1世の戴冠～1806年)の枠組みのもとに300余りの「領邦」が存在した⁸⁾。このなかで、18世紀後半から19世紀前半は、フランス革命とナポレオン戦争の時代であり、「ドイツ」の意識が芽生え、変化していき、「ナショナリズム」が強化されていく時期であると大雑把に見なすことができる。

18世紀はドイツ語圏でも「啓蒙 Aufklärung」の時代である。「啓蒙」の中心的な言葉が「理性」であるとすれば、「理性」は、人間一般にあるとされ、身分や民族や国を超えている。イギリスやフランスのように中央集権的な王権が成立していないドイツ語圏には、プロイセンのフリードリヒ大王、オーストリアのヨーゼフ二世、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト三世、ヴェルテンベルクのカール・オイゲン公、ザクセン・ヴァイマルのカール・アウグスト公など「啓蒙絶対君主」が、「改革」を志していた。「知識層」は、「世界市民」「コスモポリタン」「学者共和国」などの語に見られるような、「普遍主義」的意識が強く、「民族主義」や「ナショナリズム」はまだそれほど強くなかった。

「自文化」の意識が曖昧であり、多様であるので、「異文化」も、文脈により、ヨーロッパの他言語の文化、ユダヤ人の文化、中近東のイスラム文化、インドや中国や日本などの東洋の文化、南北アメリカの先住民の文化など、さまざまである。

カント(1724-1804)は、『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』を初めとする哲学書により近代哲学の時代を画した哲学者として知られるが、終生、現代の大学で言えば「教養学部」や「教養部」に当たる「哲学部」の教師であった。当時のケーニヒスベルク大学は、「神学部」「法学部」「医学部」という三つの専門学部と「哲学部」の、四学部からなる伝統的タイプの大学であった。すでに述べたが、晩年の著作『学部争い』(1798年)は、「上級学部」とされる三つの専門学部に対し、「下級学部」とされる「哲学部」の

意義、すなわち、「理性」にもとづいて「学問の関心」である「真理」にのみ配慮し、「自由に」「批判」する「哲学部」が大学の「魂」、「中心」であるという、「リベラルアーツ」や「哲学」や「教養」の重要性を論じた大学論である。

カントは大学教師であり、1755年冬学期にケーニヒスベルク大学「私講師」に就任し、1770年3月に「正教授」に任命され、1796年に最後の講義をしている。この間、「論理学」「形而上学」「道徳哲学」「合理神学」など、狭義の哲学講義のほかに、「教育学」や「人間学」や「自然地理学」のような一般教養の講義を行っている。「人間学」や「自然地理学」講義は、学生だけでなく、市民も聴講する、人気の講義であったという。カントの講義は「自由な談話であり、機知と気まぐれが魅力を添えていた」という⁹⁾。「自然地理学」の講義は、ケーニヒスベルク大学で教え始めた二学期目の1756年夏に始められ、48回、改訂しつつ繰り返したという¹⁰⁾。

「人間学」と「自然地理学」は、学んだ学問を人生にとって役に立つようにするための「世界知／世間知 Weltkenntnis」¹¹⁾の学問で、学校や大学で学んだ「教科 Disziplin」を「職業や社会での人生の実験的経験」に結びつけるところに主眼がある。大学生は、この「世界知」によって「予習」、「先取り」して¹²⁾、のちの人生において経験を秩序だてて整理することができる。ばらばらの経験ではなく、経験を秩序だてて位置づける、その見通し、「体系」をもっていることが、経験の理解につながる。教育という営みが、学生・生徒のその後の経験の「先取り」を含むということは、現代でも同じで、そこに「教える」側の視野の広さや射程の長さや、学生・生徒の興味を掻き立てる工夫の必要性がある。

カントは「社交 Gesellschaft」、すなわち「ひととの交際 Umgang」「交流、コミュニケーション Verkehr」が、「われわれの認識」にとって重要であるとたびたび述べている¹³⁾。交際の中での意見交換は、「他者」の「視点」から、物事を見ることの経験につながる。

カントによると、「表象 Vorstellung」において「わたくし das Ich」の観念をもつことができることが、他の存在にまさる人間の特別な点、人間を「人格 Person」とするものである。人間は、「わたし、僕」と言って語りはじめてから、「エゴイズム Egoism」を発達させる。「エゴイズム」のために、自分の判断を他者の知性や他者の趣味によって吟味することを不要とみなしたり（論理的エゴイスト、美感（美学）的エゴイスト）、なんでも自分の目的や利益に関係づけて判断したりする（道徳的エゴイスト）。そうした「エゴイズム」は、「真理」に近づき、誤謬を避けることを難しくする。「エゴイズム」に対して「プurlラリズム Pluralism」（複数主義、多元主義）が大切である。「プurlラリズム」とは、自己について、「自分の内に全世界が含まれているとみなすのではなく」、自己を「単なるひとりの世界市民 Weltbürger」とみなし、そのように振る舞うという、「思考法」である¹⁴⁾。

カントには「世界市民」という概念がある。この概念は「コスモポリタン Kosmopolit」のドイツ語訳として17世紀後半から用いられるようになり、18世紀半ばに雑

誌のタイトルになったり、人口に膾炙するようになったという¹⁵⁾。カントにおいて、「世界市民」は、上記の「プルラリズム」に関連するとともに、歴史哲学（『世界市民という視点からみた普遍史の理念』）や、政治哲学（「世界市民法」の理念）との関連で用いられる。異文化を知り、異文化について語るとき、カントは、「理性」の立場、「コスモポリタン」の視点に立っている。

カントの「自然地理学」は、まず「認識」について、「全体」が問題となると述べる¹⁶⁾。認識は、知識の寄せ集め（Aggregat）ではなく、「体系的」なものである¹⁷⁾。認識のもとは、世界認識の場合、「理性」に導かれた「経験」である。「経験」は、「自分の経験」であるか、「他人の経験」であるかであり、「自然地理学」の場合、他人との「交際」や、かずかずの「旅行記」が、「他人の経験」にあたる。自分の経験だけでは不十分なのである¹⁸⁾。旅をしなかったカントは多くの旅行記を渉猟し、それを材料に講義している。諸外国や辺境の地についての「報告」により、「あたかも自分がそれらの国で生活しているかのように」「認識を拡張する」のだ¹⁹⁾。

カントの「自然地理学」は五つの部門からなる：(1)「数理地理学」：地球の大きさ、形状など。火山、地震、日本の「高熱泉」や「台風」についても触れられている。「地球上に分布するもの」に関しては、「人間」についても取り上げられている。「鼻がほとんど顔から突き出してはならず、目は小さく」、「短足」というところは「日本人」にも共通であり、あまり美しくないが、「それらの中にも時折」「もう少し美しい人々がいる」などカントは述べている²⁰⁾。(2)「倫理地理学」：地域ごとの人間の慣習や性格。たとえば中国や日本で「父親を殺害するのは最も恐るべき犯罪」であることが紹介される。いっぽう、「ラップランド」では、狩猟中に負傷した父親を息子が殺すのは「愛の義務」とされている。(3)「政治地理学」：市民社会では、「法律」と法律違反に対する「強制力」が第一の原理となっているが、「個々の法律」は「土地柄や住民性」と関連している。(4)「商業地理学」：土地により産出される物質が異なり、「通商」によって「世界全体に均一の状態がもたらされる」。「通商」によって「人間は洗練され、人間の相互理解が築かれてきた」。(5)「神学地理学」：「神学上の諸原理」は、「土地の違い」によって「本質的な変化」を受ける。たとえば「東洋のキリスト教」と「西洋のキリスト教」を「比較」すると「微妙なニュアンスの違い」がわかる²¹⁾。

「日本」はあまり知られていない国とされている²²⁾。「中国」は、「全世界で最も人口が多く、最も文化の高い帝国」であると紹介される²³⁾。その「風習と国民性」については、「中国人が美しいと思うのは」「背が高く太った人」であり、「がらがら声で立派な髭のある」男性だ、などと語られる。中国人は、「落ちついた性格」で、「山奥にとどまって」「他人の胸の内を探究しようとする」。「怒り狂うこと」は軽蔑される。「復讐心が強いが、好機が到来するまで我慢」できる。「礼儀作法に気を配りすぎている」。「古い慣習を頑固なまでに崇拜」している。女性の纏足のこと、食事に「黒檀の棒きれ二本」用いることなど、珍しい風習が挙げられる。「礼儀作法」に関しては、「罵倒したり悪態をつくような人」は

いないこと、「何かを懇慫に拒絶するには」どうすべきかなど、人々が心得ていること、学問については、「学位の制度」があり、官職は「博士号」を持つ人々によって占められていること、天文学については、キリスト教の「宣教師」が「福音」を説く際に「科学の知識」が「奇跡の代役」を務めたことなどが紹介されている。「法令」については、第一に「両親に対する子供たちの服従」、第二に「為政者にたいする服従」、第三に「懇慫さと礼儀作法」に関するものがあるとされる。宗教に関しては「冷淡」で、多くの人々は神を信じておらず、宗教を受け入れている人々も、その宗教とあまり関わり合わない。「中国のソクラテス」である「孔子」を尊敬している。「仏教」では、「無が万物の根源と終局」であると考えているなど。「結婚」については、「当事者同士が相まみえることなしに、両親のあいだで」決められること、「大金持ち」は何人でも妻を「買っている」こと、「いい年をして身を固めない男は、中国人のなかにはめったに見られない」など。終生独身であったカントが、このようなことを講義で話しているのを想像すると、なんだかおもしろい。カントの余裕とユーモアを感じる。現代日本のテレビ番組で、「海外」の「不思議なこと」「面白いこと」が紹介されているのに似た面もある。

カントの「自然地理学」には、倫理・道徳や、法律や、宗教について「比較」する姿勢がある。そしてその「比較」は、地球という人間共通の場所である自然の基盤の上になりたち、「通商」というコミュニケーションが地域をつなぎ、文化の交流を促進している。

カントは、「自分で考える」ということが人間にとって、啓蒙にとって、大事なことだと考えていた。「人間の先入見や思考様式が多様であることを示す」²⁴⁾ことは、人間が自身自身を相対化して知るために役立つ。

カントは哲学について、「学校概念 Schulbegriff」と「世界概念 Weltbegriff」を区別していた。

カントは、『純粹理性批判』で「哲学は（それが歴史的でないかぎり）は決して学ぶことはできない。理性にかんしては、ひとはせいぜいのところただ哲学することを学ぶのみである」という²⁵⁾。「哲学を学ぶことはできない man kann keine Philosophie lernen」。「みずから考える勇気をもて」という『啓蒙とは何か』の言葉が反響している。哲学者は、「歴史的」な何かある「哲学体系」の「生徒」であるのではなく、みずからの「体系」を構築する。カントにとって「哲学」は「一つの可能的学問の単なる概念」であり、「この理念はどこにも具体的には与えられていない」。哲学者は、「さまざまな道筋を通して」「この理念に近づこうとする」。「哲学することを学ぶ philosophieren lernen」とは、「理性の才能を、理性の一般的な諸原理に従いつつある種の目前のもろもろの試みに即して練磨すること」を学ぶことである。その際、「それらの試みそのものをその源泉において研究し実証しあるいは論難する理性の権利をつねに留保している」²⁶⁾。以上の意味での「哲学すること」は、哲学の「学校概念」である。

そしてカントは、「哲学という名称の根底」に、哲学の「世界概念 Weltbegriff (conceptus cosmicus)」がある、という。「ことにこの概念がいわば人格化され、哲学者という理想

Ideal において一つの原型として表象された場合にはそうである。」このように考えると、「哲学は、すべての認識が人間理性の本質的諸目的に対してもつ関係についての学問 (teleologia rationis humanae) であり、哲学者は理性の技術者 Vernunftkünstler ではなくて、人間理性の立法者 Gesetzgeber der menschlichen Vernunft である」。「そのような意味において、自分自身を哲学者と呼び、理念 Idee のうちにのみある原型に等しくなったと僭称することは、はなはだしいうぬぼれであろう。」²⁷⁾

カントによれば、「数学者、自然科学者、論理学者」も「理性の技術者にすぎない」。「理想の教師」は、「人間理性の本質的諸目的を促進するために、これらすべての認識に着手し、これらの認識を道具として利用する」。「この教師のみをわれわれは〈哲学者〉《哲学者たち》と呼ばねばならないであろう。しかし、彼自身はどこにも見出されない...」。だが、そのような哲学の教師の「立法の理念」は「人間理性のうちなら到るところに見出される...」。カントは哲学の「世界概念」について、「各人が必然的に関心を抱くことに関わる概念である」と注記している²⁸⁾。イエニッシュによってまとめられた「論理学」講義によれば、「世界〔俗世〕概念」に従うなら、「哲学とは、人間理性の最終の諸目的についての学である」。「この高次の概念」が、「哲学に尊厳を、すなわち絶対的な価値を与える」²⁹⁾。「実践的な哲学者、教説と実例による知恵の教師こそは、本来の哲学者 Philosoph [知恵の愛好者] である」³⁰⁾。

カントは、哲学とは「学問／科学 Wissenschaft」と「知恵 Weisheit」の統一であると考えている。「学は知恵の道具としてのみ内的で真実な価値をもつ...」³¹⁾。「学問的な知識の空虚さ」と「ある種の虚栄」から「学の嫌悪者 Misologe」になることがあるが、「学なしの知恵」は問題である³²⁾。

3. おわりに

カントは「知恵 Weisheit」（賢知）に導くための「格率 Maxime」として、(1) 自分で考えること、(2) (他の人間と交流する際に) 自分を一人一人の他人の立場に移しかえて考えること、(3) 常に自分自身と一致して考える、ということを挙げている³³⁾。その中で「異文化」を見ることは、(2) に当たる。「ブルラリズム」に立って、他者の視点からも物事を見る「目」をもつことである。

カントは、「知恵」や「世界市民」や「永遠の平和」などは「理念」であって、それがすぐに実現、到達できるとも、歴史上に実現するとも考えていない。人間は、「動物」のように単に「本能」に従って行動するわけではないが、「理性的な世界市民」として行動するわけでもない³⁴⁾。人間の営みは、虚栄心、破壊欲、幼稚な悪意など、愚かさに満ちている。

しかし、人間同士が対立し、それが切磋琢磨となり、「非社会的な社交性」や知的発展が出てくる。国と国のあいだにも「非社交性」が働く。「協調性」の欠如のゆえに、諸国

家は「敵対関係」のうちに置かれる。「自然は戦争を通じて、そして戦争にそなえて決して縮小されることのない過剰な軍事力を国家に準備させ、こうした軍備のために平時にあっても国内の窮迫を実感させる」。「さまざまな荒廃、政府の転覆、国力の徹底した消耗などを経験した後になって、やっとのことで、理性があればこれほど痛ましい経験を積まなくても実現できたはずのこと、すなわち無法な未開の状態から抜け出して、国際的な連合を設立するという課題を実現するようになるのである」³⁵⁾。20世紀の経験では、「国際連合」や「日本国憲法」が頭に浮かぶ。

カントは「人類の歴史の全体は、自然の隠された計画が実現されるプロセスとみることができる」という³⁶⁾。「自然 Natur」は「摂理 Vorsehung」と言い換えられることもあり³⁷⁾、このような歴史の見方は、「千年王国説 Chiliasmus」と表現される。ある種、終末論的な眼差しがある。そしてこの眼差しは、「熱狂主義的 schwärmerisch」ではない³⁸⁾。宗教改革後の時代の「熱狂主義的」セクトなどの、ユートピア的な「千年王国的」革命運動とは異なる。しかし、未だ到達せざる状況に立って、未来を見る「明るさ」がある。

「自分で考える勇気をもつ」ことがカントの「啓蒙」であった。大学の（カントの意味での）「哲学部」、「教養学部」「教養部」「教養課程」「リベラルアーツ」「一般教養」は、関与者それぞれが「自分で考える」ための場である。カントの『実用的見地における人間学』から引用しよう。

「人間の内面における最も意味深い革命は、「人間が自分に責任のある未成年状態から翔び立つこと」である。それまでは他人が彼の代わりに考えてくれ、彼は模倣するかよちよち歩きを助けてくれる紐に掴まるかしていればよかったのだが、今や人間はそれを断ち切って、当分はよろめきながらかもしれないが、あえて経験という大地のうえを自分の両足で前進し始めるのだ」³⁹⁾。

わたくし自身は、1960年代末の大学の「教養」課程において育てられ、「自分で考えようとする」誤り多き試行錯誤をとおり、「教養」課程で「翔び立」とうとする人びとと時間を共に過ごすことになった。しっかり学問に励むべきであったと悟ったときには、視力も気力も集中力も低下している。「自分は正真正銘善く生きるべきであったといま初めて自覚したとたんにそろそろ死ななければならないとは、残念なことだ」と言うカントやキケロに同感せざるをえない⁴⁰⁾。人間個人の人生は短く、経験はごくわずかである。カントは「個々の人間」をこえて、「人類」の将来を考えていた。

(2017年9月)

注

- 1) 「リベラルアーツ」の歴史にはここではふれず、「リベラルアーツ」という言葉を大学教育における「教養」という意味で用いる。

- 2) カント『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3篇』（中山元訳）光文社古典新訳文庫、2006年、10頁。Kant, Immanuel: Werke in zehn Bänden, Bd. 9, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1975, S.53 (A481)。
- 3) カント『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3篇』（中山元訳）光文社古典新訳文庫、2006年、11頁。
- 4) 中井章子「カントの大学論とリベラルアーツ」、『パレーシア』第2号（2008年）、33-56頁、参照。
- 5) コンラート・パウル・リースマン『反教養の理論——大学改革の錯誤』（斎藤成夫／齋藤直樹訳）法政大学出版局、2017年、参照。
- 6) 「比較すること」について、カント「人間学講義」（中島徹訳）、『カント全集』第20巻（講義録Ⅱ）、岩波書店、2002年、342頁参照。
- 7) 「学校だけではなく、人間が自分自身を育てあげなければならない。自分に何が欠けているか最もよく知っているのは自分だけであるから。若い人々には、くりかえし鍛えることでまた別の本性が作りあげられるという大きな長所がある。年配の人々にはこれはできない。」カント「人間学講義」（中島徹訳）、『カント全集』第20巻（講義録Ⅱ）、岩波書店、2002年、434頁。
- 8) ドイツ史に関しては、木村靖二編『ドイツ史』（新版 世界各国史13）、山川出版社、2001年、参照。
- 9) 『カント全集』17 講義録、論理学解説（湯浅正彦）、404頁（Borowskiによる）。
- 10) 有福孝岳ほか編『カント事典』弘文堂、平成9年、カント年譜（590-610頁）、および Irritz, Gerd: Kant-Handbuch. Leben und Werk. Stuttgart/Weimar (Verlag J. B. Metzler) 2002, S.92-94参照。
- 11) 『カント全集』16 自然地理学（宮島光志訳）岩波書店、2001年、16頁（以下、「自然地理学」と略す）。
- 12) 「自然地理学」16、17頁。
- 13) 「自然地理学」17頁、参照。「社交」や「交際」については、たとえば『カント全集』15 人間学（渋谷治美訳）、岩波書店、2003年、第Ⅰ部第88節参照（以下、「人間学」と略す）。笠原賢介『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界——クニッゲ、レッシング、ヘルダー』未来社、38-48頁、参照。
- 14) Kant: Werke in zehn Bänden, Bd. 10, S.407-411, 参照。「人間学」23-28頁参照。
- 15) Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.4, Sp.1155-1167. 『カント事典』295頁、参照。
- 16) 「自然地理学」15頁。
- 17) 「自然地理学」18頁。
- 18) 「自然地理学」19頁。
- 19) 「自然地理学」19頁。
- 20) 「自然地理学」226頁。
- 21) 「自然地理学」26-28頁。
- 22) カントは「永遠平和のために」において、日本が「来航すら、ヨーロッパのオランダに認めるだけで、来航したオランダ人をまるで捕虜のように扱って、自国の民の共同体から切り離れたのだが、これは賢明なことだった」という（「永遠平和のために～～哲学的な草案」、『永遠の平和のために／啓蒙とは何か 他3編』（中山元訳）、光文社古典新訳文庫、

2006年、187頁)。この論点は、エンゲルベルト・ケンプファー（ケンペル）『日本誌』の「鎖国」についての叙述と重なる。

カントによる日本についての言及をグラージェナップがまとめている。『自然地理学』第三部補遺、グラージェナップ編「日本」、『カント全集』18、岩波書店、2002年、417-426頁（宮島光志訳）。カントの主要な情報源は、ケンプファー『日本誌』であるとされ、グラージェナップの考証では、1733年のドイツ語重訳（英語版のドイツ語訳）の概説版と1753年の重訳版だとのことである。Vgl. Glasenapp, Helmuth von: Kant und die Religionen des Ostens, 1954.（筆者未見）。独訳決定版は、1777-1779年に、Christian Wilhelm Dohmにより出版されている。日本語訳の『日本誌』（今井正・編訳）、霞が関出版、1989年はこの独訳からの翻訳である。プリティッシュ・ライブラリーに眠っていた原稿からの校訂版が21世紀になって出版された。Engelbert Kaempfer, Heutiges Japan, hrsg. v. Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, Werke in Einzelbänden, Bd. 1/1 und 1/2, München (IUDICIUM Verlag) 2001.

- 23) 「自然地理学」323頁。
- 24) カント「自然地理学講義要綱および公告」（1757年、植村恒一郎訳）、『カント全集』2、岩波書店、2000年、259-272頁。
- 25) 「純粹理性批判」（有福孝岳訳）、『カント全集』6、115-116頁（B866）。
- 26) 「純粹理性批判」116頁（B866）。
- 27) 「純粹理性批判」116-117頁（B867）。
- 28) 「純粹理性批判」117頁（B867-868）。
- 29) 「論理学」（湯浅正彦／井上義彦訳）、『カント全集』17、岩波書店、2001年、33頁。
- 30) 「論理学」34頁。「哲学は人を謙虚にする。というかむしろ、自分を他人との比較で測るのではなく、理念に照らして測るよう、促す…哲学は自己評価においては人を謙虚にし、他人を評価するときには謙遜させる」（「人間学遺稿」「人間学」389頁）という言葉も引用しておきたい。
- 31) 「論理学」37頁。
- 32) 「論理学」37頁。
- 33) 「人間学」172頁。カントは、「理性を使いこなす」ことについて、三段階を考えている：(1)「巧みさ／熟練 Geschicklichkeit（任意の企てを達成するための技術的能力）」、だいたい20歳、(2)「利口 Klugheit（他人を自分の企てのために利用する）」40歳、(3)「知恵／賢知 Weisheit」ほぼ60歳。（「人間学」132頁）。
- 34) 「世界市民という視点から見た普遍史の理念」、『永遠の平和のために／啓蒙とは何か 他3編』（中山元訳）、光文社古典新訳文庫、2006年、33頁。
- 35) 「世界市民という視点からみた普遍史の理念」49頁。
- 36) 「世界市民という視点からみた普遍史の理念」55頁。
- 37) 「世界市民という視点からみた普遍史の理念」63頁。カント「永遠平和のために」の説明によると「摂理」とは、「人類の客観的な究極目的を実現するために、この世界の推移をあらかじめ定めている高次な要因であり、深きところにひそむ叡智 Weisheit」である。「摂理」という語でなく「自然」という語を使うのは、「摂理」と語って「人間があたかも摂理を認識できるかのごとくに」ふるまうよりも、「人間の理性の限界 Schranken der menschlichen Vernunft を考えると適切であり、（より）謙虚 bescheidener」だからであ

る（「永遠平和のために～～哲学的な草案」193頁（ ）の補足は中井）。Kant, Immanuel: Werke in zehn Bänden, Bd. 9, Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1975, S.219. カントは、自然の「機械的な mechanisch な流れ」の中に、「人間の不和 Zwietracht を通じて融和 Eintracht を作り出そうとする自然の目的 Zweckmäßigkeit がはっきりと示される」と考えている。

38) 「世界市民という視点からみた普遍史の理念」56頁。註 ii, Bd.9, S.45 (A 404) .

39) 「人間学」173頁。

40) 「人間学」132頁。

Method of comparative studies

— Thoughts from my practice of education and research

Ayako NAKAI

In college education today, in order to live wisely as individuals and as responsible citizens in the global world, it is important to place emphasis not only on education in special fields and professions, but also on liberal arts education. Within this liberal arts education, studying comparative culture can contribute a great deal.

Thinking for oneself and using one's own understanding without guidance of others, which is manifested by Immanuel Kant's enlightenment, can be a motto for liberal arts education today. In the process of thinking, the second stage is thinking from the point of view of others. This is called "Pluralism" by Kant. Comparative culture can provide an opportunity to look at the world from different perspectives.

Kant was a teacher in the faculty of philosophy, i.e. the faculty of liberal arts, and gave lectures on Anthropology and Geography during the whole of his university career. There are many aspects of comparative culture in these lectures. He held ideals of cosmopolitanism and the importance of being a citizen of the world in the context of history; he thought it important as a way to wisdom, to know and understand different cultures.

Keywords : comparative culture, liberal arts education, Immanuel Kant
